

ロンドンで学ぶ

稲場圭信

■プロローグ

親愛なるミスター稲場：

ピーター・クラーク教授は、貴方の論文を注意深く審査しました。リサーチコースという研究場所を貴方に提供できることを大変喜んでいます。

大学院秘書 ハーディング

1995年10月、ロンドン大学キングズカレッジから入学許可の手紙が届いた。さすがは紳士・淑女の国。表現が洗練されているではないか。アメリカならば、Congratulations!という言葉があるはずだが、それに比べ、なんと遠回しな表現だろうか。これが本当に入学許可なのか確信が持てずに英国人に確かめてしまったくらいである。

1995年の春、数年前から将来的なアメリカ留学を考えていた私は、1996年の留学に備えて留学先の資料を集め、問い合わせをしていた。しかし、アメリカに留学をしている知人の話を耳にし、不安を覚え始めた頃、島藺教授が薦めて下さった留学先の中にロンドン大学キングズカレッジのピーター・クラーク教授の名があったのを思い出した。そこで飯田橋にあるブリティッシュ・カウンスルに足を運び、ロンドン大学キングズカレッジの宗教学科を調べることにした。ピーター・クラーク教授は現代宗教に関する学術誌の編集者であり、キングズカレッジに存在する新宗教研究所の所長であった。日本の宗教研究プロジェクトも存在する。さらに英国における大学研究機関のレベルを教授陣の研究論文の量・質などをもとに全英の教授陣が互に評価した Research Assessment を調べた。こういったものが存在すること自体に驚かされる。Theology, Divinity and Religious Studies の分野でエントリーされている大学は30弱。そのうち 5, A をスコアーしたのは3大学だけであった。ケンブリッジ： 5, A, 21.0、キングズカレッジロンドン： 5, A, 19.0、オックスフォード：

5, A, 16.0。早急に願書を取り寄せ、金井教授、島藺教授に推薦状をお願いして、出願準備に取りかかった。イギリス留学には IELTS なる試験(Listening, Writing, Reading, Interview) を受験することが必要とされる。その成績と推薦状、大学での成績、論文、研究計画で審査される。9月末に一応の資料を整えて出願した。このときに私のロンドン留学が始まっていたともいえよう。

1996年5月31日にイギリスの地を踏んでから、はや1年半。多少の里心が湧いてきた。外国に住むと、その国を無条件に讃美し、日本を批判する人がいる。その一方で、アプリオリに受け入れていた自国文化を客観的に捉え直し、日本を再評価する人もいる。私は後者であり、月並みながら、カルチャーショックを体験し、文化学習に余念がなかった。かつての大英帝国も良い面、悪い面、両面合わせ持つ。いや多くの場合、善し悪しの問題で論じることができない。二元論的思考こそを自らの思考回路から払拭すべきなのかも知れない。それはともかくも、日本人はイギリスが好きらしい。「イギリス」より「英国」という響きの方が、耳にこちよく、目に美しいと漏れ聞く。もうブームとは言えないほどイギリスびいきが続いていて、書店ではイギリス関連の本で溢れている。そういった情報の再生産をここで試みるよりも、「学ぶこと」を中心に私が体験しているロンドン留学生生活を多少綴ってみようと思う。

■ロンドン大学

ロンドン大学キングズカレッジのキャンパスはロンドンの4カ所に分散しており、宗教学科が存在するストランドキャンパスは王立オペラハウスで有名なコヴェントガーデンの南東300メートル、大英博物館から2キロメートルにある。ロンドン経済大学とも歩いて5分の距離である。

ロンドン大学は30ほどのカレッジおよび研究所からなる連合体である。ロンドン経済大学(London School of Economics)もキングズカレッジもロンドン大学である。オックスフォードもケンブリッジも30ほどのカレッジからなる連合体であるが、こちらのカレッジは勉学とともに寝泊まりも含めた生活の場になっており、学部生は数百名、大学院生は数十名である。一方、ロンドン大学のカレッジは規模が大きく、各カレッジがかなり独立している。1826年のユニヴァーシティカレッジに続いて、キングズカレッジは1829年に設立されたが、ロンドン大学が連合体として認められるようになったのは1836年のこと。現在、キングズカレッジは、2,500名のスタッフと11,000名の学生、3,000名の大学院生を擁する。

■イギリスの教育制度

義務教育は5歳から16歳までである。5歳から11歳までが Primary School、11歳から16歳までが Secondary School と呼ばれ、大学進学の場合、さらに6th Form に16歳から18歳まで通う。この期間中に、G C S E (General Certificate of Secondary Education) という全国共通の資格試験を受験する。試験は O レベル(Ordinary level)と A レベル(Advanced level)の2種類存在し、大学の学部、学科によって、入学に必要な G C E の科目と成績が異なる。公立は Maintained School とよばれ、私立は Independent School という。Public School は公立学校という意味ではなく、Independent School の一種で、11歳から18歳までの教育をおこなう、上流階級や資産家の子弟のための全寮制の私立学校である。もっとも有名なのは、オックスフォードやケンブリッジに多数の学生を送り込んでいる、将来の約束された上流階級エリートが勉強するイートンであろう。イートン校と私立武蔵は、交換留学制度、教師交換研修制度を設けている。私の卒業後にできた制度であるが、燕尾服をまとった日本の中高生がウインザー城の近くを歩いている姿は想像しにくいことであろう。

義務教育後の進路は大学、専門学校、ポリテクニク Polytechnic などが存在する。専門学校はカレッジとよばれるが、大学のカレッジとは名前は

同じでも全く別物である。学位は与えず、数年の職業専門学校である。一方、ポリテクニクは学位取得コースもある。しかし、大学とは異なり、秘書やビジネス等の実用的職業的なコースといえる。

■大学

イギリスの大学は唯一バッキンガム大学をのぞいてすべてが国立である。そして、国からの助成金があるが、大学の各カレッジは独立採算の経営になっている。総合大学は50ほどしか存在しない。日本の大学のような教養課程は存在せず、入学と同時に専門分野を履修する。単位制も存在しない。定められたコースの履修とともに最終試験に合格することにより学位取得となる。学期は3学期制を採用し、年間10本ほどのエッセイを提出し、最終的なエッセイと試験によって学位が授与される。

大学院のコースは、以下の3つ存在する。

- Postgraduate Diploma: 1年のコースに出席し、試験を受けて終了。学位ではない。
- MA, MSc, MBA: 1年のコースに出席した後、試験を受けて取得。

- MPhil, PhD リサーチ: 最低2、3年、指導を受けながら研究、論文を提出して審査、取得。

私は MPhil, PhD コースに在籍する。ひたすら研究を続け、指導教官とディスカッション。セミナーで発表をしながら論文を書き上げるコースである。同じリサーチコースの Daren とランチをとりながらお互いのリサーチについて議論をしたりしている。彼はイングランドのサリー生まれのミドルアッパークラスのイギリス人で、私よりも少々背の高い好青年である。リサーチ3年目の彼は自分の研究の意義について悩み休学していたが、吹っ切れたのか幸いにも復学した。こんなこともあった。突然30ページほどの彼のリサーチ報告を渡され、私の意見と感想を求められた。こちらも下手なことは言えないので、1週間の猶予をもらい、きちんと読んで自分の意見と質問事項をまとめておいた。その後、ランチをとりながら2時間くらい話しただろうか。非常に有意義な時間である。

リサーチ大学院生はセミナー以外、授業に出る義

務がない。自分から情報交換をする友人をもっていないと孤独な研究生活になってしまう。しかし、私は昨年度、リサーチコースのセミナーの他に、少人数ゼミ2つ、宗教社会学の大学院講義、新宗教の学部講義、方法論の大学院講義などに自主的に出席した。

■教授・大学院生・パブ

大学院リサーチ宗教社会学セミナーは毎週木曜日の夕方に行われる。発表者は教授とリサーチ大学院生である。時には海外から発表者が来ることもある。他大学の先生も頻繁にみえる。発表内容によって15名ほどの時もあれば、30人を超えるときもある。私も1997年の2月に発表した。セミナー自体は1時間の短いものであるが、実は続きがある。毎回、キングズカレッジから歩いて5分のテムズ河に浮かぶ船上パブに行くのである。質問がある人はとことんするし、質問がない人は他の人と議論を始める。参加者は5人くらいの時もあれば、15人ほどになることもある。必ず出席するのはクラーク教授とハーディ教授、マーク、そして私である。ちなみに、ここではクラーク教授と書いているが、普段はファーストネームでピーターと呼んでいる。学部生は許されないが、大学院生は先生方をファーストネームで呼ぶ。先生からそのように提案してくるのである。

異邦人の私にとって先生方や同僚とパブにいたり、食事をしたりするのは貴重な時間である。もちろんパブでの議論は、すぐにビールの泡の中に埋没することになるのはいうまでもない。

■リサーチと評価

私は、現在、イギリス起源の仏教系新宗教とキリスト教系新宗教運動のリサーチをしている。テーマは意識変容と利他主義である。彼らのコミュニティにいったインタビューをしたり、食事をもとにし、食器洗いまでもする。もちろん、先行研究の読み込みをしながらである。こういったリサーチの進み具合は、指導教授だけでなく、ロンドン大学全体の委員会によってモニターされる。半年に一度ほど学生の研究の進み具合について指導教官の評価が書き込まれたレポートが自宅に

送られてくる。内容に同意する場合にはサインをしてオフィスに送り返す。そして、それはロンドン大学の委員会に提出されるというシステムである。もし、内容に不服な場合には委員会への申し立ても可能である。最低3年研究を行い、論文を提出すれば PhD の審査が実施される。論文審査が他大学教授2人を含め3人の教授によって行われ、それに通ればヴァイヴァ VIVA VOCE という口頭試験である。それに合格すれば晴れて PhD 取得となる。道は険しい。

■図書館

ロンドン大学キングズカレッジのストランドキャンパスの図書館は80万冊の蔵書。それがいくつかの建物に分かれていて、古い建物のエンバークメント図書館はすべて宗教学・神学関係の書籍。これとは別に、ロンドン大学全体の図書館が大英博物館の近く、キングズカレッジから徒歩20分のところにある。私はキングズカレッジの図書館を主に使用し、社会学系の定期刊行物などは近くのロンドン経済大学 London School of Economics に行く。もちろん、すべてキングズカレッジの端末で検索してからである。他大学の図書館はおろか大英図書館のカatalogまでもキングズカレッジから検索できる。無駄がなく非常に良い。また、マイクロフィルムで論文を読むこともある。キングズカレッジの図書館に存在しない場合、スタッフに注文する。2、3週間ほどして、大英図書館からキングズカレッジに送られてくる。費用は1ポンドである。コンピュータ検索で該当無しの書名しか分からない文献でもスタッフがどこの図書館に存在するかを探してくれる。そして郵送されてくる。海外へ注文した場合も、やはり費用は1ポンド。国からの助成金によって運営されているのであろう。この恩恵を受けられるのは先生方とリサーチの大学院生だけである。

ロンドンに亡命中のマルクスが『資本論』を書き上げた大英図書館は、1、800万冊を所蔵する。誰でも入れるわけではないが、研究畑にいればイギリスに住んでいなくても問題なくパスをつくれるはずである。5年間有効。今のところ無料である。リーディング・ルームでは、本を見ながらノ

ート型パソコンに凄まじいスピードで打ち込んで
いる人たちが多数いる。もちろん、いかにも英国
といったリーディング・ルームで優雅に読書とい
う感じの人もいるが、大半はリサーチ。気合いが
入っている。まさに研究は情熱と気迫である。現
在、大英図書館は、1999年をめどに移転工事進行
中である。この工事の遅延のせいであろうか、250
年もの間無料であった大英図書館が有料化を思案
中である。大英図書館には頻繁に行くことはない
が、やはり無料閲覧を続けて欲しいものだ。入館
料を支払って入るのは味気ないし、大英図書館に
相応しくない。また、大英図書館の一部、新聞図
書館も検索が非常に便利で重宝している。これも
有料になってしまうのだろうか。

■書店

キングズカレッジから徒歩15分、チャリング・
クロス・ロードのフォイルズ Foyles 書店は لندن
最大の書店である。日本の八重洲ブックセンタ
ー(地下1階から地上5階、150万冊、国会図書館の
データも揃える)、新宿の紀伊國屋といったところ。
この Foyles の 2 階、つまり the 1st Floor (ア
メリカと異なり、イギリスでは一階は the ground
floor という) には HMSO (政府刊行物) のコー
ナーがある。まるで渋谷の大盛堂書店の 3 階、政
府刊行物サービス・ステーションのようである(霞
ヶ関の政府刊行物センターにわざわざ足を運ばな
くても済む)。

大英博物館、ロンドン大学全体の図書館の近く、
ガウアー・ストリートのディロンズ DILLONS
は、神保町すずらん通りの東京堂書店のよう。私
は東京堂書店が好きであった。学術書が充実して
いる。在庫の数も多い。靖国通りから少々奥ま
ったところにあり、本を求める人の流れは三省堂で
ストップする。ロンドンには DILLONS の支店が
いくつもあるが、ここの DILLONS も地理的には
繁華街を離れ、一般の人はあまり来ないのではな
いか。学術書に焦点を当てて30万ほどのタイトル
数を誇る。同じタイトルの書籍をいれると100万冊
以上だろう。

そういえば、神保町のはずれにある北沢書店。
この洋書店の建物はドーリア式で、天上が高く雰

囲気が大変結構なのだが、あれはイギリスの昔な
がらの図書館に似ている。あのドーリア式は、イ
ングリッシュ・バロック様式(キリスト教世界最
大教会ロンドンのセント・ポール大聖堂)がある
ように、実はイングリッシュ・ドーリア式ではな
いだろうか。

品揃えでは、フォイルズとディロンズが良いが、
注文するときにチャリング・クロス・ロードの
Blackwells が一番親切で、スムーズにことを進め
てくれる。私はここのスタッフと顔見知りになり、
彼は他店で入手できなかった書籍でもあらゆる手
段を講じて入手してくれる。私のデータはこの書
店に登録されていて、注文の時に住所を書く必要
もない。書店からの書籍到着の知らせを待つだけ
である。

■チャリティー

イギリス地域社会、どの生活エリアにもチャリ
ティーのお店がある。自分が着なくなった服、も
らいもので不要なものなどをそのお店に寄付し、
店はそれを安く売る。その利益がチャリティーに
使われるのである。Red cross, All Aboard(working
for charity), Oxfam, Salvation Army など多数
の団体が行っている。本当に驚くほど多数存在す
る。ほとんど意識しないくらいに、チャリティー
は生活にとけ込んでいる。宗教も含めて、長年の
教育が生み出してきたものであろう。

有名なチャリティー団体をあげると、心臓病に
対するキャンペーンをする British Heart Founda-
tion、ホームレスや高齢者に活動する救世軍 The
Salvation Army、児童福祉のためのバーナード財
団、児童救済財団 Save the Children Fund、海外
の貧しい人々の救済のための Oxfam、高齢者のた
めに活動している団体への金銭的助成 Help the
Aged などである。宗教団体はたいていチャリティー
団体になっている。

チャリティー法(Charity Law)は1992年に制
定されたが、チャリティー組織の近代的概念は1601
年のエリザベス女王の法令から発達したものであ
る。その当時は目的として、高齢者、困窮者の救
済、学校の保守、教会、道路の修理などが含まれ
ていた。分類は固定的ではなく、エリザベス女王

の法令の精神から逸脱しない目的に関して受け入れ、近年では人種間の調和、男女間の平等を求めるトラストなどがチャリティー組織となっている。国の機関の審査を受け、チャリティー団体になると免税などの特典があり、社会的信用も得られ、寄付もうけやすくなる。新聞の広告割引も存在するのである。チャリティショップめぐりも楽しいものである。思わぬ掘り出し物に巡り会うこともある。そして、購入すればチャリティーに寄付されるのだから2倍うれしい。

■エピローグ

日本と比べて、学生の生活環境はきびしい。私は、キッチン、トイレ、シャワーなどを3人の大学院生とシェアしている。シャワーは浴びている最中に足下に洗濯機の排水が流れてきたりするし、壁や天井にはヒビが入っている。カーペットはす

り切れている。誰かがシャワーを浴びているときにはトイレにも入れない。4人だから結構大変である。しかし、ロンドンの学生たちはこういった生活をあたりまえのようにしている。彼らはトマトソース煮のマメ缶詰を美味しそうに食べている。食事や服装に構わず好きなように生きている。私も自分で何でもやるようになった。色あせたシャツやジーンズを染めたり、もともと好きではあったが日曜大工もする。廃材で椅子をつくったりもした。これらは、私の異国文化における研究方法の姿勢を示すものである。狂牛病を心配して牛肉を口にしなかったのに、リサーチ先のコミュニティで牛肉を出されて心配しながら食べたのもその一端である。何かを得るためには何かを失うものであろうか。スポンジ頭になるのは無論御免であるが、いろいろと大変である。